感染症発生動向調査委員会報告　5月

≪今月のトピックス≫

- A群溶血性レンサ球菌咽頭炎が、高めです。
- 伝染性紅斑が、過去5年と比しやや高めです。
- 感染性胃腸炎が、過去5年と比しやや高めです。小学校等で集団感染の報告がありました。
- 水痘が、高めです。
- 流行性耳下腺炎が、過去5年と比し高めです。

平成22年4月19日から5月23日まで（平成22年第16週から第20週まで。ただし、性感染症については平成22年4月分）の横浜市感染症発生動向評価を、標記委員会において行いましたのでお知らせします。

平成22年　週－月日対照表	
第16週	4月19～25日
第17週	4月26～5月2日
第18週	5月3　～　9日
第19週	5月10～16日
第20週	5月17～23日

全数把握疾患

＜細菌性赤痢＞

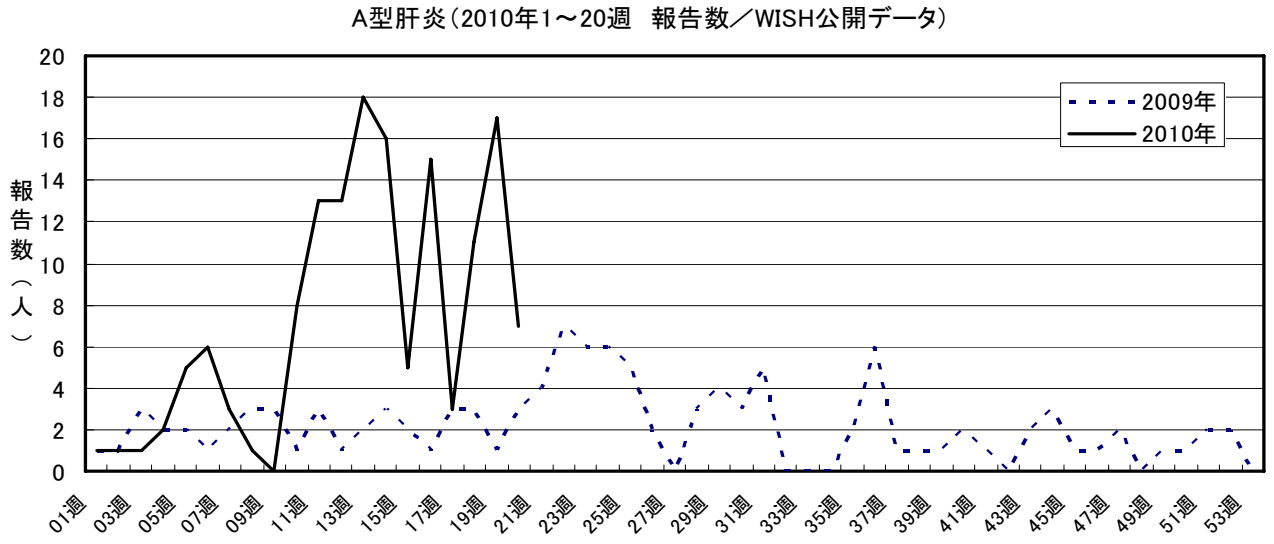
1例の報告がありました。渡航地はベトナムです。

＜腸管出血性大腸菌感染症＞

2例の報告がありました。うち1例の渡航地はブラジルです。

＜A型肝炎＞

1例の報告がありました。春先から全国で国内での感染の報告が増えています。主に魚介類による経口感染によるものですが、性行為による感染も報告されています。他県では劇症肝炎による死亡も見られました。今年度第10週より全国レベルで報告数の増加が見られています。横浜市の22年度に入ってからの報告数は現在までで計2例であり、2例とも医療機関でIgM抗体検査が行われ、その後衛生研究所にてPCR検査で陽性が確認されました。



国立感染症研究所 HP より

＜麻しん＞
5例の報告がありました。1歳2例、10歳代2例の計4例にはワクチン接種歴がありました。30歳代の1例のワクチン接種歴は不明です。また、臨床診断としての届出の後に、IgM検査の結果取り下げた例も複数見られました。
本年は、5月27日現在で累積27例が報告されています。
なお、昨年は年間43例の報告があり、そのうち25例(58.1%)が5月までに報告されています。

麻しん排除のために、全数検査が重要になってきています。麻しんが疑われる場合は、早めに福祉保健センターにご相談ください。

定点把握疾患

1 患者定点からの情報

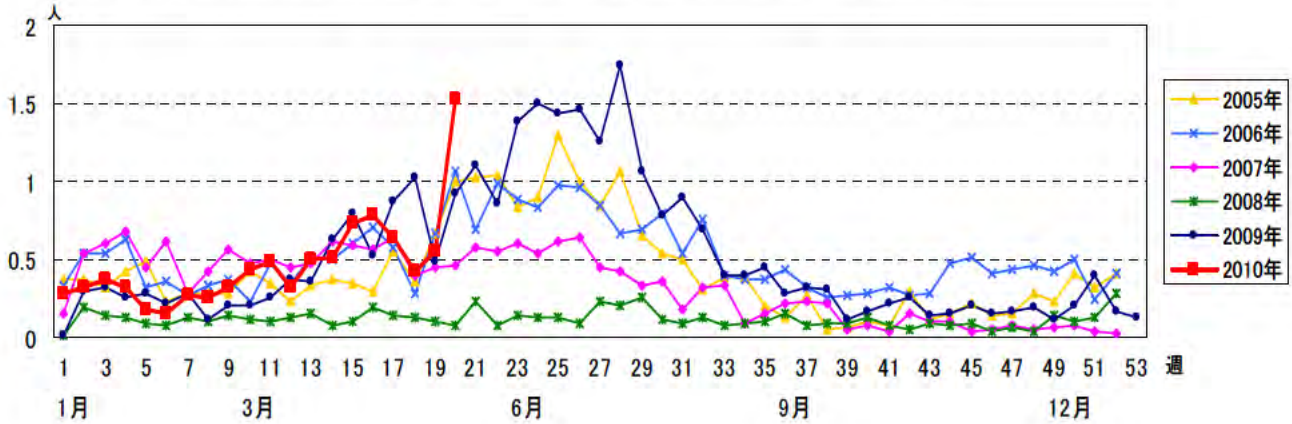
市内の患者定点は、小児科定点:88か所、内科定点:57か所、眼科定点:18か所、性感染症定点:26か所、基幹(病院)定点:3か所の計192か所です。なお、小児科定点は、インフルエンザと小児の11感染症を報告します。内科定点はインフルエンザのみを報告します。従ってインフルエンザは、小児科と内科で、計145定点から報告されます。

＜A群溶血性レンサ球菌咽頭炎＞
例年夏にかけて流行が見られています。第20週は定点当り2.23でした。
行政区別では、港北区5.29、青葉区3.86、緑区3.75、保土ケ谷区3.40と高めです。全国では1.82、神奈川県(横浜、川崎を除く:以下県域)1.99、川崎市は2.63、東京都1.98でした。

＜感染性胃腸炎＞
第20週では定点当り6.62でしたが、過去5年間との比較では高めです。
行政区別では、緑区20.00、泉区15.00がまだ警報域です。全国では8.49、県域7.85、川崎市9.69、東京都7.55でした。

＜水痘＞
第20週では定点当り1.88でした。行政区別では中区4.67、神奈川区3.75、西区3.33が高めです。全国では1.89と横浜市とほぼ同じですが、県域1.50、川崎市1.41、東京都1.49でした。

＜伝染性紅斑＞
過去5年間と比し、高めで推移していましたが、第19週は定点当り0.55、第20週は1.52と急増しています。
行政区別では泉区9.00、瀬谷区7.25、神奈川区3.25、磯子区2.25の4区が、国の示す警報の基準を超えています。全国では0.53、県域1.84、川崎市0.47、東京都0.65でした。
例年初夏から流行が見られる疾患ですので、今後の推移に注意が必要です。



＜流行性耳下腺炎＞
第20週では定点当り1.18でした。行政区別では、神奈川区3.25、緑区2.75が高めです。
全国では1.24、県域1.91、川崎市0.59、東京都0.89でした。

＜性感染症＞
性感染症は、産婦人科系の定点と、泌尿器科・皮膚科系の定点からの報告に基づき、1か月単位で集計しています。
4月は、性器クラミジア感染症は男性が14例、女性が19例でした。性器ヘルペス感染症は、男性が6例、女性が12例です。尖圭コンジローマは、男性が7例、女性が6例でした。淋菌感染症は、男性が6例でした。

【 感染症・疫学情報課 】

2 病原体定点からの情報

市内の病原体定点は、小児科定点:9か所、インフルエンザ(内科)定点:3か所、眼科定点:1か所、基幹(病院)定点:3か所の計16か所を設定しています。
小児科定点は9か所を2グループに分け、毎週1グループの検体を採取しています。インフルエンザ定点は特に冬季のインフルエンザ流行時に検体を採取しています。眼科と基幹定点は、対象疾患の患者から検体採取ができた時に随時実施しています。

＜ウイルス検査＞
平成 22 年 5 月に病原体定点から搬入された検体は、小児科定点 36 件(鼻咽頭ぬぐい液 32 件、ふん便 4 件)、眼科定点 3 件(結膜ぬぐい液)でした。
患者の臨床症状別内訳は、小児科定点は上気道炎 19 人、下気道炎 6 人、胃腸炎 5 人、不明熱 2 人、インフルエンザ、ヘルパンギーナ、咽頭結膜熱、発疹各 1 人、眼科定点は急性角結膜炎 3 人でした。

6 月 10 日現在、小児科定点の上気道炎患者 3 人からアデノウイルス(5 型 1 人、型未同定 2 人)、インフルエンザ患者からインフルエンザウイルス AH3 型、咽頭結膜熱患者からアデノウイルス(型未同定)が分離されています。

これ以外に遺伝子検査では、小児科定点の上気道炎患者 2 人からコクサッキーウイルス(A4 型、A6 型各 1 人)、上気道炎患者 2 人からヒトメタニューモウイルス、下気道炎患者 1 人から RS ウイルス、胃腸炎患者 2 人から新型インフルエンザウイルス、胃腸炎患者 1 人からアデノウイルス、ヘルパンギーナ患者からコクサッキーウイルス A6 型、不明熱患者から RS ウイルスの遺伝子が検出されています。また、アデノウイルス(型未同定)が分離された上気道炎患者 2 人から新型インフルエンザウイルス遺伝子が検出されました。

その他の検体は引き続き検査中です。

【検査研究課 ウイルス担当】

＜細菌検査＞
5月の感染性胃腸炎関係の受付は小児科定点から糞便が5件、基幹定点から菌株が15件、定点以外の医療機関から菌株が2件でした(表)。そのうち、小児科定点からはサルモネラが1件、基幹定点から腸管病原性大腸菌(O18:H7、O125:H6)が2件、腸管毒素原性大腸菌(O159:H34、ST産生)が1件、赤痢菌(*S.sonnei*)が1件、定点以外の医療機関から腸管出血性大腸菌O157、VT1＆2およびO157、VT2が各1件検出されました。

溶血性レンサ球菌咽頭炎の検体受付は小児科定点からの6件でA群溶血性レンサ球菌が5件から検出されました。その血清型はT1が3件、T12が1件、T28が1件でした。

基幹定点において劇症型溶血性レンサ球菌感染症から分離された検体はA群溶血性レンサ球菌でT型別不能でした。

表　感染症発生動向調査による病原体検査（5 月）細菌検査

感 染 性 胃 腸 炎

検 査 年 月	5月			平成22年1～5月		
定点の区別	小児科	基幹	その他**	小児科	基幹	その他**
件　数	5	15	2	8	47	13
菌種名						
赤痢菌		1			2	1
腸管病原性大腸菌		2			4	
腸管出血性大腸菌		1	2		2	12
サルモネラ	1			1		
不検出	4	11		7	39	

その他の感染症

検 査 年 月		5月			平成22年1～5月		
定点の区別		小児科	基幹	その他**	小児科	基幹	その他**
件　数		6	1		30	3	8
菌種名							
A群溶血性レンサ球菌	T1	3			14		1
	T4				1		
	T12	1			3		
	T28	1			2		
	T B3264				1		
	T型別不能		1			1	
メチシリン耐性黄色ブドウ球菌						2	
バンコマイシン耐性腸球菌							2
髄膜炎菌							1
不検出		1			9		4

＊＊定点以外医療機関（届出疾病の検査依頼）

T（T型別）：A群溶血性レンサ球菌の菌体表面のトリプシン耐性T蛋白を用いた型別方法

【検査研究課　細菌担当】